

“Lord Arthur Savile’s Crime”に見るジャンルの交錯

北 田 沙 織

はじめに

Oscar Wilde の中編小説 “Lord Arthur Savile’s Crime” は、1887年 *The Court and Society Review* に掲載された。この物語は、主人公の青年、Lord Arthur Savile が Lady Windermere 主催の夜会に出席した際、手相見 Septimus R. Podgers から、殺人の相が出ているとの宣告を受けるが、その運命を回避しようとはせず、自ら進んで殺人を犯すというものである。プロットを見れば、奇妙な話であるように思われるが、この物語の面白さは、アーサーが婚約者 Sybil Merton の幸福を守るために、結婚を取りやめるのではなく、結婚前に運命すなわち「義務」を忠実に全うしようとする、そのひたむきさにあると言える。そもそもの始まりとして、「アーサー・サヴィル卿の犯罪」が、ワイルドがパーティーで友人たちをもてなす即興の笑い話として生まれた¹というのが由来であることから、ワイルドがこの物語を全くの喜劇として作り上げたと考えられなくもないだろう。

だが、Christopher S. Nassaar は、本作品を「読者を楽しませることを意図した、笑いを誘うナンセンスな物語 (a short and hilarious nonsense tale that is meant to amuse and delight)」(Nassaar 142) だと述べた上で、後に出版された「陰鬱で悲惨なゴシック・ホラー小説である (a dark and sinister novel of Gothic horror)」(142) *The Picture of Dorian Gray* (1891) と非常に深く結びついているのだという、大変興味深い指摘をしている。一見正反対だと思われるが、こうした批評も出始めており、この二つの物語は、テーマや文体の観点から見ても、全体的に関連し合っている (138) とナッサールは述べている。物語の成り立ちがまるで逆で、明暗が明確に分かれてはいるが、

確かに、アーサーは「運命」、ドリアンは「美しさ」という、自身では全く知らなかった、あるいは意識していなかった事実を知らされ、人生を大きく左右された結果、ともに最終的に苦悩の元凶となった人物を殺害するという点は、二作品に共通した設定であるといえる。

アーサーの強過ぎる殺人への執着は、読者にその「義務」なるものへの大きな疑念を抱かせることとなり、「殺人」あるいは「死」という深刻なテーマを、完全に喜劇のジャンルに落とし込むことはできないのではないだろうか。本稿では、この物語におけるジャンルの交錯について考察を試みるとともに、「義務の一研究 (A Study of Duty)」という、一見すると喜劇には似つかわしくないように思われる副題が付けられていることについても考えながら、ワイルドが本小説のキーワードである「義務」を巡って何を訴えようとしたのかについて検討したい。

1. アーサーの喜劇性

アーサーは初め、家柄にも経済的にも恵まれた優雅な暮らしをしてきたがゆえに、苦勞のない悩みとは無縁の人物として登場する。しかし、その状況は手相見ポジャースとの出会いをきっかけに一変することとなる。ポジャースはアーサーの手を見て真っ青になるものの、なかなかその原因を述べようとしない。そこで恐怖に駆られたアーサーの様子が次のように描写されている。

All this time, Lord Arthur Savile had remained standing by the fireplace, with the same feeling of dread over him, the same sickening sense of coming evil. . . . He thought of Sybil Merton, and the idea that anything could come between them made his eyes dim with tears.

Looking at him, one would have said that Nemesis had stolen the shield of Pallas, and shown him the Gorgon's head. (16)

このとき「生まれて初めて恐怖を感じ」(13)、自身を待ち受ける恐ろしい運

命を悟るわけだが、自身の肖像を目にして初めて自身の美しさを知ったドリアン・グレイのように世間知らずな一面があるように思われる。そして、後にポジャースがアーサーの手の内に見たものが「殺人」であったと知った彼は、闇の底に突き落とされたかのごとく衝撃を受け、彼はこの世は何とかなるという「光に満ちた表面的な楽天主義 (the shallow optimism of the day)」(22) では乗り越えられないものがあることを知るのだ。「闇」というものを知らずに生きてきた彼であるからこそ、その闇は彼を飲み込んでしまうほどに大きなものであったことが推察される。

絶望の中、アーサーが彷徨い込んだのは、ロンドンのいかがわしい路地であった。: Where he went he hardly knew. He had a dim memory of wandering through a labyrinth of sordid houses, of being lost in a giant web of somber streets, and it was bright dawn when he found himself at last in Piccadilly Circus (23)。先に引用したナサールも指摘しているように、『ドリアン・グレイの肖像』にもこれと酷似した描写が見られるが、こうした彼の行動から、夜という暗闇の中で、自身に降りかかろうとしている殺人という「恐ろしい運命」を前に打ちひしがれていることを、ワイルドが真剣に描写していることがわかる場面である。

さらに、彼はドリアン同様に非の打ち所がない美青年で、犯罪とも無縁の人物である。そのような彼が、貧困層や娼婦の女性が多数存在し、犯罪が多発していた地域（恐らくイースト・エンドであると思われる）に、無意識に赴いていたことは、後に彼が犯罪と関わりを持つことを暗示していたのかもしれない。

このようにアーサーは、初めはそれほどコミカルなキャラクターとして提示されてはいない。しかしながら、この夜以降、奇妙にも彼はそれまでの苦悩をあっさりと忘れることになる。アーサーは夜明けのコヴェント・ガーデンで、市場で働く農夫たちの姿を目にし、朝の訪れとともに晴れやかな気持ちになっていく。彼の目には、荷馬車に積まれた野菜の山が、「朝焼けに映える翡翠 (masses of jade against the morning sky)」(23) のように、非常に

美しい光景として映り、農夫たちはまるで天使のように描写されている。アーサーは、「素朴で、荒っぽさもあるが陽気な笑い声、ゆったりとした雰囲気醸し出す (These rustics, too and their rough, good-humored voices, and their nonchalant ways)」(23) 彼らの中に、「夜の罪悪 (the sin of night)」(24) や「昼間の煤煙 (the smoke of day)」(24) に汚されていないロンドンがあることを知る。ここで彼は、自身が体験している人生における光と闇に、ロンドンの街を重ね合わせ、ロンドンにも光と影の面、二面性があることを目の当たりにしたのだ。そして、家路に就き、昼下がりの柔らかな光に包まれながら入浴を済ませた頃には、彼を苦しめていた葛藤は完全に消え去っているのだ。

いよいよ喜劇役者としての面を見せていくアーサーは、自らが殺人犯であることが世間に露呈し、結婚を控えた彼が未来の妻シビルを不幸にさせないために、彼は結婚前に殺人を済ませることを心に誓う。彼にとって、殺人を犯すことはシビルのための「自己犠牲 (sacrifice)」(28) であり、さらに言えば、嫌悪感のために殺人を犯さないという選択をすることは良心に反し、また利己的であるとさえ彼は考えている。このように突飛な解釈をするアーサーだが、彼のシビルに対する感情は単なる愛情以上のものであり、彼女は彼にとって、「善良さと高貴さのすべてを象徴するもの (a symbol of all that is good and noble)」(28) なのだ。ナサールも指摘しているように、彼女はいかなる悪 (evil) や汚れ (corruption) (ナサール139) からも遠ざけられるべき神格化された存在であり、「すべてはシビルのために」とジェントルマンシップを重んじようとするこのひたむきさが彼の喜劇性だといえる。

アーサーはまず、最初の標的を利害関係の無い遠戚に定める。自作の毒薬入りカプセルを手渡し、心臓に病気を抱えていたまたいこの Lady Clementina Beauchamp を、病死を装い毒殺しようと試みた。1ヶ月後、彼女の訃報を知った彼は、殺人を成し遂げたと喜ぶが、死因は発作による自然死であり、カプセルは飲まれていなかったことが判明する。計画失敗に終わった彼は、すぐさま第二弾を執行し、おじを爆死させることにする。時計

仕掛けのダイナマイト爆弾を手配し、チチェスター大聖堂の司祭長を務めるおじの自宅に郵送するが、今度は爆弾の威力が弱く不発に終わる。第一の計画では、犯行が明るみに出ない完全犯罪を成立させるために周到な準備を重ねていたにもかかわらず、第二の計画では、爆弾というかなり派手な手段を選択している。ここに、アーサーの焦燥感と、何としても成功させなければという、殺人への義務感と強い執着心が表れているといえるだろう。

このように、二度の失敗を経ても殺人を思い止まることはなく、微笑みを向けながら二人を手には掛けようとするアーサーの精神は普通ではない。ただ、最終的には誰も彼の被害者になることはない。成功したかに思われた殺人が実は自然死であった、あるいは爆弾が効かなかったことで、彼の犯行計画は未遂に終わり、読者にある意味での救いが与えられる。そうして読者は笑いながらこの物語を読み続けることができる。しかしながら、その後起こるポジャースの一件は、これまでの二件とは全く性質の異なるものである。

度重なる失敗に、運命に見放されたと失望するアーサーは、初めて予言を聞いた時と同様、夜のロンドンを彷徨う。偶然にもポジャースを見かけ、彼をテムズ川に放り込み殺害に成功する。後日、ポジャースの死は自殺として報じられることとなり、何とも呆気ないが、アーサーはついに、誰にも悟られることなく殺人という「義務」、婚約者シビルへの「責任」を果たす。だが、平然と殺害計画の遂行に当たり、最終的に殺人を成し遂げるというアーサーの精神は、読者の心にわだかまりを残すように思われる。

ポジャースは不運にもアーサーの被害者となったわけだが、ここで、なぜポジャースだったのかについて考えてみたい。彼の殺害は、計画にはなかった突発的な行動ではあるが、とにかく殺人を犯さなければという義務感に駆られたアーサーが彼を標的にしたのは、ある程度必然的であったのかもしれない。彼が手に掛けようとした先の二人に怨恨は一切なかったが、ポジャースはアーサーの苦悩の根源となる人物であったのだ。追い詰められた心境にあって、その苦悩が瞬間的にアーサーに彼を死すべき存在として意識した、あるいは彼なら標的に相応しい人物と判断したと考えてもおかしくはないだ

ろう。

このように、彼には人格的に闇があることが描き出されているが、その重く暗い要素は、犯行直後の場面において、まるで緩和されるかのようである。

At last he seemed to have realized the decree of destiny. He heaved a deep sigh of relief, and Sybil's name came to his lips.

"Have you dropped anything, sir?" said a voice behind him suddenly.

He turned round, and saw a policeman with a bull's eye lantern.

"Nothing of importance, sergeant," he [Arthur] said, smiling and hailing a passing hansom, he jumped in, and told the man to drive to Belgrave Square.
(56-57)

犯行を終えた彼の心は清々しさと満ち溢れており、警官からの声掛けに対し、全く動じる様子もなく、「(落としたのは) 大したものではありませんよ、お巡りさん。」と軽快に返答するが、まるで自身に言い聞かせているようにも取れるこの台詞に、ポジャースという人間の非重要性、価値の低さを強調しようという彼の心情が表れているといえるだろう。

そして、殺人を成し遂げたアーサーのその後を描いた結末部は、彼は晴れて婚約者シビルと結ばれ、光り輝く美しい楽園の中で愛らしい二人の子どもたちにも恵まれ、幸せな結婚生活を送るというハッピー・エンディングで締め括られている。この物語には、終始コミカルな調子を保とうというワイルドの意図が感じ取れるものの、最後にアーサーの手相、予言への絶対に揺らがぬ信頼に対して、ワイルドは、ウィンダム嬢夫人に "What nonsense!" (61)、"I never heard such nonsense in all my life" (61) という批判的な表現で以て語らせている。ワイルドが彼を否定的に提示しようとしていることを示すフレーズだといえるだろう。

2. アーサーの「義務」と犯罪

このようにアーサーが死守しようとした義務は、彼にとっては非常に真剣

な主張に裏付けられたものではあるが、極めて特殊で「喜劇的」と呼べる恣意的な義務であることは明白だ。ナサールは、彼は「ただの一度も良心の呵責を感じない」(ナサール137)と強調している。確かに、アーサーが殺人を試みる上で、一切良心を痛めることはない。だがそれは、彼が「正しい」行いをしているという認識でいるためである。前章でも触れたように、決して良心が「無い」わけではないのだ。むしろ、彼独特の純粋な「良心」の声に従うために、殺人を犯す必要があったのだ。

This [murder] done, he could stand before the altar with Sybil Merton, and give his life into her hands without terror of wrong doing. This done, he could take her to his arms, knowing that she would never blush for him, never have to hang her head in shame. But done it must be first; and the sooner the better for both.

Many men in his [Arthur’s] position would have preferred the primrose path of dalliance to the steep heights of duty; but Lord Arthur was too conscious to set pleasure above principle (27 – 28)

このように、“This done”、「殺人が為されれば」という表現が繰り返し用いられているのは、義務を遂行しようという彼の強い意志の表れである。アーサーは人一倍義務への忠誠に厚い人間であり、「主義すなわち義務よりも快楽や欲望を優先することは、良心が咎めてならない」潔癖主義者 (puritan) として描かれている。だが、社会的にそうした行為が容認されることは決してなく、彼がいかに「義務」に囚われていたのかを示しているといえる。

さらに、注目すべきなのは、こうした「義務」への執着が生んだ殺人が非常に皮肉な結果をもたらすことになるという点にある。数年後、幸福の絶頂にいたアーサーの許を訪ねたウィングミア卿夫人によって、彼が信じてやまなかつた手相見ポジャースの真の姿が暴露される。夫人は彼の妻、シビルに “Do you remember that horrid Podgers? He was a dreadful imposter. Of course, I didn’t mind that at all, and even when he wanted to borrow money I

forgave him, but I could not stand his making love to me” (60) と語る。ここで、金銭欲や性欲といった世俗的な欲望にまみれたポジャースの知られざる一面が明かされ、彼が信用に足る人物ではなかったことが判明する。人の運命を読むことができる人物として登場した彼は、常人離れした、人智を超えたものとの繋がりを持った予言者的存在であった。この時点では、人間の外見と内面に存在する差異や二面性にアーサーはまだ気付いていなかったと思われる。

“Well, he is not a bit like a chiromantist. I mean he is not mysterious, or esoteric, or romantic-looking. He is a little, stout man, with a funny, bald head, and great gold-rimmed spectacles; something between a family doctor and a country attorney” (7)

これは、当初ポジャースについて夫人が語っていた印象である。このように、神秘的で特別感のある雰囲気や、ロマンティックな風貌というよりは、慎ましく堅実な性格であると紹介されていたポジャースだが、「ペテン師 (imposter)」と呼ばれたことで、実際にはそのどちらでもないことが明らかとなり、その上、彼の占い能力自体までもが疑わしいものとなるのだ。

しかし、ワイルドは先述のようなポジャースへの批判をアーサーには聞かせない。彼のまるでおとぎ話のような幸福の世界が崩れ去ることはなく、彼は幻滅から守られるわけだが、なぜワイルドは、殺人という大罪を犯したにもかかわらず、アーサーに幸せな結婚生活を与えたのか。あえてその美しい世界を保つことで、彼の幸福や彼を突き動かした「義務」に対する読者の疑念を、エンディングでより増大させる意図がそこにはあったのではないだろうか。物語はこのようにして終わりを迎えるが、結局アーサーの行為は何の意義もない単なる殺人であったということを示しており、ワイルドは、読者だけにこの皮肉を感じさせるエンディングを用意したのである。

さらに、それだけでなく、アーサーに関して次のような描写がある。

He had also to think of Sybil’s father and mother, who were rather old-fashioned people, and might possibly object to the marriage if there was anything like a scandal, though he felt certain that if he told them the whole facts of the case [murder of Lady Clementina] they would be the very first to appreciate the motives that had actuated him. (31)

昔気質のシビルの両親が、彼女のためにアーサーが行う犯罪、その動機をもし仮に知ったならば、必ずや感謝されるに違いないと彼は真剣に思い込んでいたのだ。こうした彼の理解は喜劇ゆえの「おかしさ」というものではないだろう。ドリアンは、自身の犯す悪が肖像画に醜悪さを帯びさせていくことで、表面的な美と肖像画に反映される内面的な醜、すなわち表と裏の二つの顔を併せ持つことになり、それを明確に自覚していたのに対して、アーサーには、自覚的には二面性、二重性は存在しない。だが、それは無自覚な精神異常と呼べるものであり、彼自身にも見えていなかった自己が存在していることを示しているのではないだろうか。

3. 副題の意義

一見喜劇的なこのようなストーリーに、「義務の一研究 (A Study of Duty)」という、学術論文や研究書を思わせるような副題が付いていることには、どのような意味があるのだろうか。

名誉や義務に囚われ、殺人から逃れることができなかった (neither honor nor duty would allow him to recede) (36) アーサーのように、ヴィクトリア朝後期の貴族階級あるいは中産階級の英国人たちもまた、同様のものに囚われていた。Philip K. Cohen はこれについて次のように述べている。

Wilde asserts that the mindless commitment to duty, and action unwittingly brings about the destruction of one’s authentic self. Furthermore, this Victorian dedication, which transforms duty and action into ends in themselves, is capable of staggering inhumanity in pursuit of its twisted ideals;

Wilde illustrates this through Lord Arthur's dutiful homicide. (Cohen 54)

異常なまでに義務への執着が強いアーサーの人物設定に加えて、その遵守すべき「義務」の極端な例として、「殺人」を取り上げることで、喜劇のヴェールを被せながらも、こうした人々を束縛していた「義務」に、ワイルドは強い違和感と批判をぶつけていたのではないだろうか。そのひとつの根拠として、彼が同性愛者であったということが言えるかもしれない。

犯罪や義務ということに関して、ワイルドが高みの見物をしていられたわけでは決してない。多種多様な「個」を受容する現代の目から見れば、異性愛至上主義的な考えを示し、彼の同性愛を非難する者は少数派だろう。しかしながら、ワイルドが生きた19世紀英国では、男性は女性を、女性は男性を愛することが義務であり、それに従わない者は健全な精神状態にないとさえ考えられた時代なのだ。さらに言えば、同性愛は違法であり、1885年には、刑法修正法 (Criminal Law Amendment Act of 1885) により、男性間の性的な関係は「著しい猥褻行為 (gross indecency)」(Adams 227) として禁じられた。ワイルド自身もアーサー同様「犯罪者」であったのだ。この点については、先に引用したコーエンも "... he [Wilde] used the story as a means for veiled confession . . . Lord Arthur's preordained crime suggests Wilde's latent homosexuality" (54) と述べ、アーサーの犯罪とワイルドの同性愛との関連を指摘している。

本作品の副題が持つ意義、それは、この「義務の一研究」という副題が、いかに皮肉になっているか、あるいはそれだけに止まらず、義務というものに縛られた英国社会に対して、ワイルドが決してコミカルではない、言わば真剣な危機感や抵抗感を抱いており、それについて人々にメッセージを送ることにあったのではないだろうか。そのためには、やはりこの副題が必要であったと考えられる。

おわりに

「アーサー・サヴィル卿の犯罪」は、一般的には喜劇だと考えられている作品であり、「騒がしい喜劇 (the boisterously comic)」(Sloan 104) だと断言する批評家もいるほどだ。だが、本作品は実際に殺人というものが起きるストーリーであり、ナサールが指摘しているように、『ドリアン・グレイの肖像』を思わせるような描写が物語前半に非常に重なっていることから、やはり、喜劇というジャンルだけには落とし込めない作品である。

アーサーは、極端な義務の観念に基づいて執拗に殺人を犯そうと躍起になり、実際に殺人を犯すという、言わば笑いの対象として描かれている。だが、彼は義務に縛られ過ぎた19世紀英国の現実社会を批判するために、ワイルドが作り出したキャラクターであり、作品自体は非常に軽やかさを維持してはいるものの、皮肉に溢れた内容となっている。殺人ということに関して、アーサーの所々に見られる精神的な異常さや倫理的歪み等を考えると、この物語には、コメディーだと思って単純に笑うことができない面が明らかにあり、ジャンルとしては喜劇と悲劇のどちらにも属し切れていない。1章でも触れたように、物語を締め括る最後の言葉として、“What nonsense!” (61)、“I never heard such nonsense in all my life” (61) という表現をワイルドが選択していることを考慮すると、この台詞に彼の批判がすべて集約されているように思われる。

ある種のブラックユーモアのようなこの物語を、完全な笑い話として捉えることはできず、やはりそれは喜劇の範疇に収まり得るものではないわけだが、ただ、ナサールも指摘している (ナサール137) ように、こうした作品があったからこそ、数年後の『ドリアン・グレイの肖像』へと発展し、その際には本作品に見られるような喜劇的要素は完全に抜け切ることとなる。

注

- 1 John Sloan の *Oscar Wilde: The Complete Short Stories* の Introduction を参照。

Bibliography

- Adams, James Eli. "Dandyism and Late Victorian Masculinity," *Oscar Wilde in Context*. Edited by Kerry Powell and Peter Raby. Cambridge: Cambridge UP, 2013, pp. 220 – 229.
- Cohen, Philip K. *The Moral Vision of Oscar Wilde*. London: Associated University Presses, 1976.
- Nassaar, Cristopher S. "Oscar Wilde's 'Lord Arthur Savile's Crime' and *The Picture of Dorian Gray*: Point Counterpoint," *ANQ: A Quarterly Journal of Short Articles, Notes, and Reviews*, vol. 27, no. 3, 2014, pp. 137 – 143.
- Sloan, John. Introduction. *Oscar Wilde: The Complete Short Stories* by Oscar Wilde. 2nd ed. Edited by Sloan. Oxford UP, 2010.
- Wilde, Oscar. "Lord Arthur Savile's Crime: A Study of Duty," in *Lord Arthur Savile's Crime and Other Prose Pieces, The Collected Works of Oscar Wilde*, volume VII. Edited by Robert Ross. Routledge / Thoemmes Press, 1993.
- . *The Picture of Dorian Gray*. A Norton Critical Edition, 2nd ed. Edited by Michael Patrick Gillespie. New York: W. W. Norton, 2007.